

幼児期に行う「ヌード（裸体像）デッサン」が 引き出す効果について

——レッジョ・エミリアアプローチのテーマを通して——

三榎 正典

Effects Arising from “Nude (Naked Imagery) Design” during Childhood

——Based on the themes of the Reggio Emilia approach——

Masanori MIMASU

Abstract

This research implemented appreciation activities through dialog with children in the public space called an “art gallery” via the themes of the Reggio Emilia approach to subsequently configure lessons to draw “nude images”, which are displayed in the central halls of art galleries, with the objective of evoking the children’s “creativity” through this “creative experience of art”. The nude images are Aristide MAILLOL (1861-1944)’s Venus (1918-28); materials and size: Bronze (174.0 × 55.0 × 40.0 cm).

はじめに

2011年4月～7月にワタリウム美術館において、北イタリアのレッジョ・エミリア市で実践された幼児たちの作品展「驚くべき学びの世界展」が開催された。ワタリウム美術館では、2001年に開催した「子どもたちの100の言葉」展において、日本で初めて大々的にレッジョ・エミリア市の幼児教育の実践を紹介し、大きな反響を呼んだが、今回の展覧会は、前回の展覧会を引き継ぐものであり、一貫しながらも様々に変化・深化してきた現在の指導理念を示す展覧会であった。レッジョ・エミリアの幼児教育の指導原理の特徴は、アートを中心にして、その創造的経験によって子どもの個性や可能性を最大限、無限大に引き出している、まさにハーバードリードが提唱した「芸術による教育」を実践しているところにある。日本におけるレッジョ・エミリア幼児教育研究の第一人者である佐藤学（2011）は、レッジョ・エミリアの幼児教育について以下のように紹介している。

レッジョ・エミリアの教育は、第2次世界大戦中のレジスタンス運動によって誕生し、ローリス・マラグッツィ（1920-1994）という類まれな教育者の指導によって開花しました。彼は、レッジョ・エミリアの保育者達と協同して、デューイ、ピアジェ、ヴィゴツキー、フレネ、フレイレ、ブルーナーなどの理論を創造的に統合して、アートを中核として子どもの学び発達する権利を実現する画期的な教育実践を創出してきました。その創造性あふれる教育は、1970年代には北欧を中心とするヨーロッパ諸国、1980年代以降はアメリカに、そして「世界で最も優れた教育」（『ニューズウィーク』詩1991年）と絶賛されて以降はアジア諸国を含む全世界に知られるに至ります。

また、レッジョ・エミリアでは、常に実験的な教育方法を試み、幼児と教師たちが同じ視線で取り組み、コミュニケーションをとることによって新しい発見を創造している点も注目すべき点でもある。その顕著な例が独自に設定される教育プロジェクトのテーマである。2001年に初めて日本で紹介された時のテーマであった「環境空間」「光と影」「言葉」から今回の展覧会では「身体空間」「音と形」「文字」と幼児の表現活動がより多彩に発展し、進化・深化、洗練された教育方法が展開されている。

そこで、本研究では、レッジョ・エミリアの指導原理や教育プロジェクトのテーマに沿って現在、継続して実践しているひろしま美術館での鑑賞及び表現活動の授業を再構成し、「アートの創造的経験」によって幼児の持つ個性や可能性などの「創造性」を引き出すことができるかどうか、検証を試みたものである。

1. レッジョ・エミリアのアプローチ

レッジョ・エミリアは北イタリアの小さな都市で、今日まで教育研究者をはじめ、教師たちが、親と市民と協働しながら、幼児教育システムを築き上げてきている。この幼児教育システムは、革新的な哲学と教育学の仮説、学校組織の方法、環境デザインの原理を独自に進展させていったもので、それら全体をまとめて「レッジョ・エミリアのアプローチ」と呼ばれている。このアプローチは、子どもの表現活動に体系的なテーマを当てることによって、子どもの個性や潜在的な能力を引き出そうとしているもので、子どもたちは、テーマに沿って自分たちの環境を探求し、自分自身を表現していくことをサポートされているのである。レッジョ・エミリアの教育プログラムの創始者のローリス・マラグッツィ（2001）は、このアプローチにおける関わりの重要性について以下のように述べている。

このようなアプローチは、私たちの哲学と基本価値の多くを表しています。これらは、相互作用的で構成主義的な様相、関わりの緊密さ、協力の精神、研究における個人的で集合的な努力を含んでい

ます。私たちは多様な文脈を尊重し、社会的な相互作用のなかの個人的な認知活動に注意深い関心を向け、効果的なつながりを築いています。コミュニケーションの双方向の過程を学ぶことによって私たちは幼児に関する政治的選択について広く気づくようになり、子どもと大人の間の相互の適応を奨励し、大人の教育能力の成長を促進しています。私たちは、認知的もしくは身体的な対象としてのみ焦点化し、感情や情感を過小評価し軽視することによって、子どもを自己中心的なものとする見方からまさに決別したのです。

また、アプローチ全体の目標とアプローチによって生じた成果を以下のように述べている。

私たちのアプローチの目標のなかで、それぞれの子どものアイデンティティを、それが仲間や大人から生じていることを認識することによって強化することは、それと同じくらい、それぞれの子どもが学校の活動に参加するに十分な帰属感と自信のセンスを感じることでした。この方法で、私たちは、子どものなかでコミュニケーションネットワークの拡大を促進し、あらゆるレベルで文脈を活用した言語の習得と理解を促しています。その結果、子どもたちは、コミュニケーションが個人や仲間グループの自律性をどのように豊にしているかを発見しています。思考の方法やコミュニケーションの方法や行為の方法に依拠して、このグループは交換と対話によって相互に結びついた特殊な全体を形成しているのです。

世界的に最新の教育法として注目を集めているレッジョ・アプローチの重要性は、子どもの権利をめぐる関係的な教育学を樹立したことにあると言われている。中でも「空間」との関係性は重要なテーマの一つである。子どもが日常生活する「空間」に、家庭、学校、地域社会、自然環境という広がりの中で、親や教師、行政、地域社会がどう関わるか、子どもたちとどう向き合い、どのように一人ひとりの個性や能力を引き出していくことができるのか、子どもたちの未来の社会や自然環境にも緊密に関わってくる問題だと思える。子どもには幼児期から能動的な知的操作的、身体能力を発達させる環境が必要ある。ドムス・アカデミー・リサーチセンターのアンドレア・ブランツィ(2001)は「学校の形態よりも、むしろ子どもの感性を養ってくれる道具や受け取る情報の物理的な密度のほうが影響力をもつのかもしれません」と道具や情報などの環境空間の大切さを述べている。

「空間」はさまざまな方法でその空間を生んだ人々の文化を反映し、その文化の影響の積み重なりを見せてくれるものである。レッジョ・エミリアのアプローチの中で「空間」に価値をおくのは、「空間」にはものごとを組織し、さまざまな人々の間に気持ちよい関係をつくり、魅力的な環境を生み出し、変化をもたらす、選択や活動を進める力があるからである。

そして「空間」は、そこに生きる人々の考え、価値、姿勢や文化を反映する透明な水槽のようなものと言われるが、あらゆる種類の社会的、感情的、そして認知的な学びに火をつける可能性を秘めている。これらすべてが、子どもの幸福感や安心の感覚をもたらしてくれるのである。



図1 「子どもたちと都市」プロジェクトの場面と作品

る。

「地域社会での学び」を目に見える形にするためのレッジョ・アプローチの教育プロジェクトの一つに、公共的な空間（都市・広場）を題材に場所とその歴史を探究し、経験し、創造的な活動へと導く「子どもたちと都市」というプロジェクトがある。そのプロジェクトの一つに広場の人物像を描くという試みがある。今回のひろしま美術館での実践の中でもっとも重要視したのは、このプロジェクトの視点である。そして、そのプロジェクトを通して目指したのが、子どもたちの「創造性」を引き出すということである。

2. レッジョ・エミリアの目指す創造性

子どもの創造的な活動と創造的な表現については、これまで多くの教育者や表現者が色々な形で言語化されてきているが、レッジョ・エミリアの創始者でもあるマラグッツィは創造性を極端なものとは考えず、日常経験から生じるものとしてとらえ、その理念を以下の9項目にまとめている。

1. 創造性は、分離した精神的な能力として考えられるべきではなく、むしろ特徴的なものの考え方、知り方、選択の仕方として考えられるべきである。
2. 創造性は、十分な支援による個人的資質の発達にともなって多様な経験から生じ、既知の事柄を超えて冒険する自由な感覚を含んでいる。
3. 創造性は、認知的、情感的、創造的な過程に表現されている。これらの過程はともに現

れ、予期せぬ解決を予知し、達成する技能を支えている。

4. 創造性にとって格好の状況は、アイデアと行為の比較と葛藤の交渉が決定的な要素となる対人的な交流にある。
5. 創造性は、大人が前もって定めた教育法に束縛されず、問題状況の観察者になり、解釈者になったときに力を発揮する。
6. 創造性は、大きな社会と同様に教師、学校、家族、コミュニティの期待に応じて、またそれらの期待に対する子どもの感じ方に応じて、好ましいものになったり、好ましくないものになる。
7. 創造性は、子どもたちが行動や理解の多様な領域で達成した結果よりも、子どもたちの認知過程に大人がより多くの関心を持つようとしたときにより見えやすくなる。
8. 知性的で表現的な活動が可能性を多元化し統合することに教師が確信すればするほど、創造性は想像力やファンタジーと親和的な交流を実現する。
9. 創造性は、子どもたちの百の言葉に扉を開いて、「知る学校 (school of knowing)」が「表現する学校 (school of expressing)」との結び目を見出すことを要請する

これらのレジヨにおける創造性の理念から導き出された「レジヨアプローチ」を通して、今まで実践してきた子どもたちの「アートの創造的経験」の見直しと再校正により、レジヨ・エミリアが目指している、子どもたちの「創造性」を引き出すことができたらと考える。

3. レジヨアプローチのテーマをもとにした学習内容

1) 「空間との関係性」～空間との対話・絵との対話～

前回の実践では見るという鑑賞の対象を美術館の本物の「作品」見るというテーマから見させ、一つ一つの作品との対話を通して見た感じや思ったことなどを引き出させた。今回は、前回のテーマに美術館全体の空間を「能動的な知的操作的能力を発達させる環境」として「空間との対話」のテーマを加え、また、絵や裸婦像などの作品を「子どもの感性を養ってくれる道具や受け取る情報」として「絵との対話」のテーマを加えて鑑賞させた。

2) 「アートの創造的経験」作品鑑賞～人物（裸婦像）を描く～

美術館の空間で、作家が作成した立体作品（人物像・裸婦像）を鑑賞し、スケッチする（再創造）ことは、美的経験への欲求を与える重要なアプローチであると考えられる。また立体作品は、多面的で色々な方向から見て、色々な気づきを喚起させることができることにより、子どもた

ちの主体的な鑑賞を作り出すことができる。今回は、幼児に「裸婦像を描く」というテーマだけでなく、色々な方向から裸婦像を鑑賞させ、しっかり「裸婦像と対話する」というテーマを加え、デッサンさせた。

4. テーマをもとにした学習過程

1) 学習過程モデル

レジヨエミリアプロジェクトのテーマをもとに学習過程を以下のように設定した。

(1) 空間との対話（空間との関係性）

学 習 活 動	学 習 内 容
空間との対話	ひろしま美術館の常設展示の「4つの展示空間」を周り、平面の作品を担当の先生と一緒に鑑賞する。

(2) 絵との対話

絵との対話	常設展示室の作品（藤田嗣治作）を鑑賞し、色々思ったことや感じたことを語り合う。
-------	---

(3) 裸婦像を描く（アートの創造的経験）

裸婦像を描く （アートの創造的経験）	裸婦像（マイヨール作「ビーナス」）を色々な角度から鑑賞し、その後スケッチする。
-----------------------	---

図2 レジヨ・エミリアアプローチのテーマを通じた学習過程モデル

2) 授業実施場所・日時・対象園及び学年の園児

実施場所 ひろしま美術館 常設展示室及び中央ホール

日 時 2011年6月13日（月）11：00～11：30

対 象 園 聖モニカ幼稚園 年長園児 51名

3) 学習のねらい

本学習では、以下のようなねらいを設定し、実践した。

1. 美術館という空間で実物の作品を「みる」「語る」鑑賞活動を通して空間や作品との対話を楽しむことができるようにする。
2. 裸婦像（マイヨール作「ビーナス」）を色々な角度から見て気づいたことがらを主体的に表現することができるようにする。
3. 「アートの創造的経験」を通して子どもたちの「創造性」を引き出すことができるようにする。

5. 事例の考察

1) 「空間との対話」

日常生活の空間と全く違った空間と出会让せることは、日頃見ることはできない個性や感性を引き出す可能性を多く持っているものである。美術館の空間は、すでに色々な作品が展示されているので、空間そのものと対話する瞬間はわずかであるが、「うわ〜!」「すごい!」など体全体で日頃とは違う空間を体感していた。

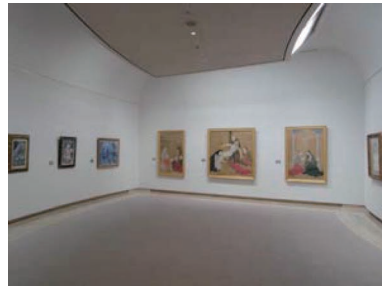
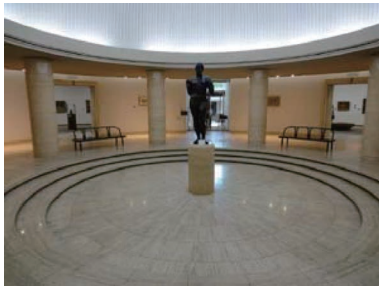


図3 ひろしま美術館常設展示室 中央ホールと第4展示室

2) 「絵との対話」

今回は、ひろしま美術館の常設展の作品の藤田嗣治の3枚の作品「受胎告知」「三王礼拝」「十字架降下」の作品を全員で鑑賞し、見た感じや感想、気づいたことなどを自由に出し合い、教師を通して対話による鑑賞活動を行った。その後、常設作品（78点）をクラス単位で鑑賞した。その際も各自気に入った絵の前で自由に会話を行なった。とりわけピカソの絵には興味を示す園児が多く、顔の絵を見ては、「カチンコチンの顔だね」「顔と顔がくっついているみたい」「おもしろいね」「ぐちゃぐちゃに見えるね」など絵から感じる色々なイメージを言葉で表現していた。

日本における「対話による鑑賞研究」の第一人者である上野行一（2011）は美術作品と対話する体験の意義を以下のように述べている。

美術作品は市民が自由に「見て、考えて、楽しむ」ために公開されている。その体験の世界は無限に広がっている。しかもそれは、きわめて個人的な体験である。同じ絵をみても、私とあなたとは絵の中で見たいところが違えば、感じ取り方や解釈の仕方も違う。同じ絵を見ていても、まるで別の作品を見ているように感想がことなることもあるだろう。



図4 絵との対話の場面 ひろしま美術館常設展示室

3) 「裸婦像（マイヨール作・ビーナス）を描く」

全員常設作品を鑑賞した後、常設展示室の中央ホールにあるマイヨール作、裸婦像の「ビーナス」をデッサンを行った。聖モニカ幼稚園は、2年前にも同じ裸婦像のスケッチを行ったが、前回は、全体のバランスを考えてデッサンすることが出来るかという技術的な視点をおいた試みであったが、今回は、「レジオアプローチ」の視点をもとに、平面作品と比べて立体作品は、360°から作品を「みる」ことができ、そこからそれぞれが違った形を見つけることができることを伝え、色々な視点からしっかり「みる」というテーマでデッサンを行った。

クラスの担任の先生は、以下のように園児のデッサンの様子を伝えてくれた。

まず、どの場所から見た裸婦像を描こうかと、色々な場所へ行ってみて考えているようでした。裸婦像の後姿、正面、横顔など、「ここで描こうかな」「こっちから見て描こうかな」と自分の気に入った場所が見つかるまで歩いて探していました。場所が決まるとすぐ描き始める子どもや、じっとビーナスを見つめて考え込んでいる子どもと、その様子は様々でした。

4) 園児の裸婦像をデッサンする位置の変化

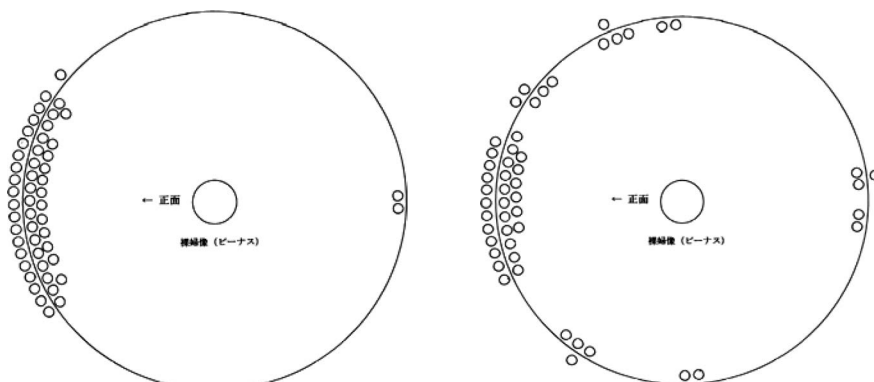


図5 園児が裸婦をデッサンした位置（左「描く」というテーマ 右「見る」というテーマ）

図5は、前回と今回で園児が裸婦像をデッサンしたときの位置を比較したものである。色々な場所から見るというテーマを加えることにより、正面だけではない場所を選ぶ園児が前回に比べて増えている。また、デッサンする場所を固定せず、移動しながらデッサンしていた園児も数名いた。

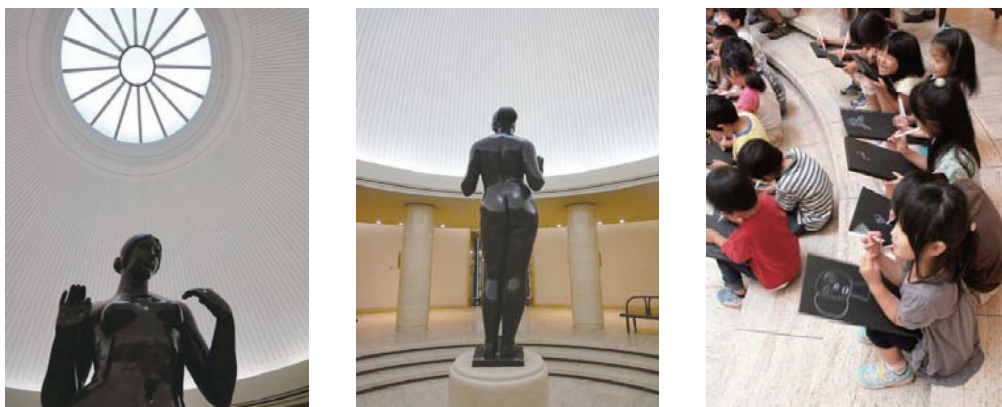


図6 裸婦像（前後）と園児が裸婦をデッサンしている様子

5) 園児のひろしま美術館での「アートによる創造体験」後の様子

今回の「アートによる創造体験」後、園に戻って色々な活動の中や、家に帰っての様子などを各担任の先生に書いていただいた。以下はその後の園児の様子である。

- ・美術館から帰ってきてから、子どもたちが鑑賞した作品が載っている画集を紹介しました。すると、昼食の後にいつも行っている「絵本タイム」では、その画集をじっくり眺める子どもたちの姿がよく見られるようになりました。
- ・教室の中にある「製作コーナー」に黒い画用紙や色鉛筆を置いていると、画集のビーナス像を見ながら黒い画用紙にビーナスを描き始める子どもがいました。すると、その姿を見て、周りの子どもたちも自分のお気に入りの絵を見ながら描くことが遊びの一つとなり、教室では「ゆり組美術館」が出来上がりました。
- ・美術館で見てきた絵を画集の中から見つけて喜んだり、友達に伝えたりしている様子を見るようになった。
- ・「ビーナスの絵をデッサンするのが楽しかった」「色々な絵があって面白かった！」「今度またおうちの人と美術館に行きたい」と嬉しそうでした。子どもたちにとっても貴重な体験となったようでした。

6. ま と め

レッジョ・エミリアの指導原理や教育プロジェクトのテーマに沿って現在、継続して実践しているひろしま美術館での鑑賞及び表現活動の授業を再構成し、「アートの創造的経験」によって幼児の持つ個性や可能性などの「創造性」を引き出すことができるかどうか、検証を試みる授業実践を行った。実際に園児が美術館で裸婦像をデッサンしているときの視点や描いた「作品」をもとに考察すると、特に顕著に見られたのが、レッジョ・エミリアの創造性の理念である1. 多角的な経験から生じ、既知の事柄を超えて冒険する自由な感覚2. 想像力やファンタジーと親和的な交流の2点である。「空間との対話」「絵との対話」「裸婦像をみる」という様々な過程の中から表現された図7では、前回のデッサンから見られない様々な視点から見た裸婦像を一枚の画面に描こうとしている自由な感覚の表現をみることができる。



図7 複数の方向から裸婦像をデッサンしている園児の作品

また、図8に見られるように裸婦像を描く過程の中で、園児によっては色々なイメージが生まれ、ファンタジーを感じさせる表現へと展開している。

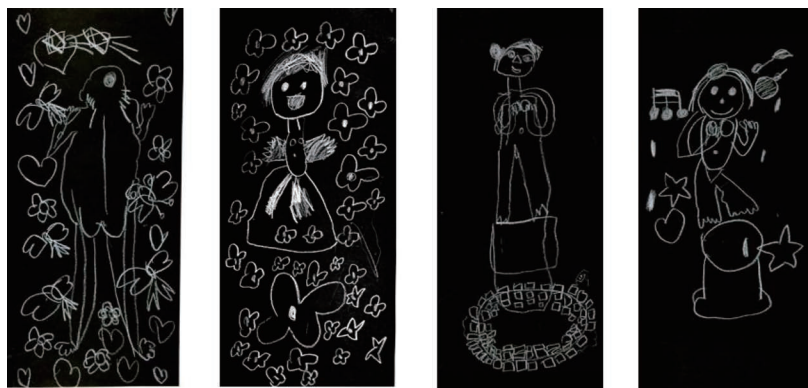


図8 独自の世界観を裸婦像をデッサンに加えている園児の作品

以上から、今回の美術館での「アートによる創造経験」は、園児のもつ「創造性」を引き出すことができたのではないかと考えられる。また、幼児期の子どもたちにとって、その最も要因となったものは、本物のアートを体感するという経験であると考えられる。本物のアートは、図録などの図版だけでは感じることでできないスケールや質感を、そして理屈だけでは伝えられない感覚を我々に伝えてくれる力を持っている。アルバート・C・バーンズ（1872-1951）が設立したバーンズ財団美術館は、そのアートの力を教育の教材として独自に展開している个性的な美術館であるが、そのバーンズ財団理事長のキャンベリー・キャンプ氏は、以下のように述べている。

財団をつくるまで20年あまり、バーンズは経営していた自分の工場の労働者に対し、美術を用いて教育を施してきました。そして、従業員の生産性や人間性を向上させてきたのです。その経験がこの財団の原点になっています。ここでは、美術を用いて人生で出会う様々な問題を解決していく訓練をしています。その際に本物の作品を用いるのが、最大の特徴です。ですから、財団は美術館ではなく、学校なのです。

美術館という本物の作品が多く展示されている「空間」は、キャンプの言葉の中にもあるようにそのものが教材であり、子どもたちは、その中から自由に気づき、学んでいくものである。示す「テーマ」を変えることにより、子どもたちのもつ可能性は、新しい展開を創り、様々な「創造性」の広がりを見せてくれる。今後は、この空間のもつ可能性をさらに広げることができる「テーマ」の研究を行っていきたいと考える。

引用・参考文献

- 佐藤 学監修. 『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』. ワタリウム美術館. 2011. pp. 8-9
- C・エドワーズ他. 『子どもたちの100の言葉 レッジョ・エミリアの幼児教育』. 世織書房. 2001. pp. 97-101
- レッジョ・エミリア市乳児保育所と幼児学校. 『子どもたちの100の言葉』. 学研. 2001. pp. 16-17
- レッジョチルドレン ドムス・アカデミー・リサーチセンター. 『子ども、空間、関係性 幼児期のための環境のメタプロジェクト』. 学研. 2008.
- REGGIO CHILDREN. 『Reggio Tutta』. A guide to the city by the children. 2000.
- REGGIO CHILDREN. 『the black rubber columu』. Grafitalia Srl, Reggio Emilia. 2009.
- REGGIO CHILDREN. 『CHILDREN, ART, ARTISTS』. preschools and Infant-toddler Cenyers Istituzione of the Municipality of Reggio Emilia. 2004.
- 上野行一. 『私の中の自由な美術 鑑賞教育で育む力』. 光村図書. 2011. pp. 9-10
- 収蔵品図録—西洋編. 『ひろしま美術館』. 1994. pp. 208-209
- 聖モニカ幼稚園教諭. 「園児の様子について」. 2011. 園児の観察記録より
- NHK. 「世界美術館紀行」. パーンズ財団理事長のキャンベリー・キャンプ氏のインタビュー. 2011放送より